

# 中野高柳遺跡

平成17年度発掘調査 現地説明会資料



南部の調査区全景（南から 左奥に岩切城跡がみえる）

平成17年7月2日（土） 10時30分～

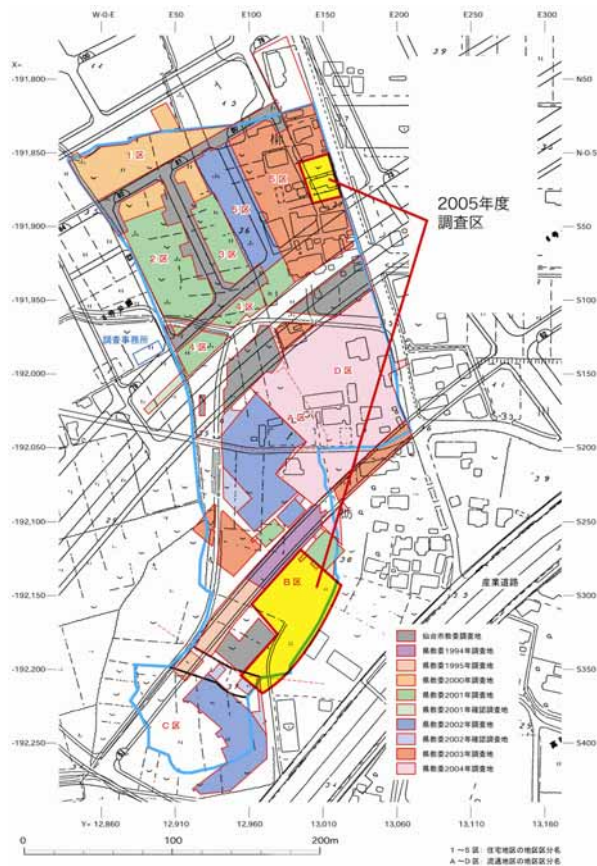
宮城県教育委員会

## 調査要項

- (1) 遺跡名 <sup>なかのたかやなぎ</sup> 中野高柳 遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01146 遺跡記号 K X)
- (2) 所在地 宮城県仙台市宮城野区福室字県道前 (3) 調査面積 約2,900㎡ (南部:約2,300㎡ 北東部:約600㎡)
- (4) 調査期間 平成17年4月18日～7月4日(予定) (5) 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課埋蔵文化財第2班

## 1.はじめに

<sup>なかのたかやなぎ</sup> 中野高柳 遺跡は仙台市宮城野区福室字県道前にあります。南西800mのところを七北田川が流れ、東は4kmで海岸線にいたります。遺跡は、多賀城市新田から七北田川に平行して南南東にのびる標高3～4mの自然堤防上<sup>しぜんていぼう</sup>に立地します。上から見ると北側が広い斧のような形をしており、規模は最も広い部分で測ると南北400m、東西150mほどで、面積は約5万㎡あります。



### 遺跡の範囲と調査地点

なっています。

本遺跡は仙台港背後地土地地区画整理事業の対象地に含まれたため、仙台市教育委員会(平成7～9・11・12年度)と宮城県教育委員会(平成6・7・12～17年度)が発掘調査を行っており、今年はその最終年度にあたります。これまでの調査面積を総合すると、約45,720㎡となり、遺跡全体の約91%が発掘調査されたこととなります。

その結果、平安時代中頃は広大な面積が畑として利用されており、同時代の末期から江戸時代は、武士階級の屋敷やその生活を支えた人々の住まいなどで構成される集落が営まれていたことがわかりました。また、屋敷を巡る溝や井戸・遺物包含層(=ゴミ捨て場)からは、当時の人々が使った焼物や木製や漆塗りの食器、木製・金属製・石製のさまざまな道具類などが出土しており、これまでよくわからなかった遺跡周辺の平安時代末期か江戸時代の生活の様子がしだいに明らかになってきています。

## 2. 鎌倉時代から南北朝時代の遺跡周辺

今年の調査では鎌倉時代から南北朝時代の屋敷跡が発見されたことから、同時代の遺跡周辺の様子を見てみましょう。現在の仙台市岩切・高砂から多賀城市・利府町にかけての一带は、鎌倉・南北朝時代には八幡荘・南宮荘・田子荘という荘園と高用名と呼ばれ

たがこくぶ  
 た多賀国府の特別行政区に分かれていました。中野高柳遺跡は八幡荘内にあったと考えられます。八幡荘は、現在の宮城野区蒲生・中野から多賀城市八幡にかけての地域が含まれ、荘内には中野・蕨壇・柑子袋・藤木田・萩園郷・蒲生郷という地名があったことがわかります。この地を治めていたのは、鎌倉時代が平姓陸奥介氏、南北朝時代以降は平姓八幡介（のちに八幡氏と称す）です。

発掘調査で明らかになった周辺の遺跡としては、仙台市岩切城跡、東光寺遺跡、今市遺跡、鴻ノ巣遺跡や洞ノ口遺跡、多賀城市新田遺跡、山王遺跡、大日南遺跡などがあります。

このうち鴻ノ巣・洞ノ口・新田・山王遺跡では、本遺跡と同じように大溝や堀で方形に区画された屋敷跡が見つっています。内部には掘立柱建物や塀、井戸などがありました。これらの中には規模が大きく、建物や井戸が立派で茶の湯の道具や高級な焼物が見つかるところがあり、こうした屋敷の主は武士階級と考えられます。

洞ノ口・鴻ノ巣・今市・新田遺跡では、鎌倉時代から南北朝時代にかけて武士階級の屋敷とともに、それより小規模な屋敷跡が数多く発見されています。このため仙台市岩切から多賀城市新田にかけての地域は、中世の文書にみられる「たがこくぶ」であるという見方が強まっています。多賀国府は、陸奥国の政治的な中心で役所や役人たちの屋敷や住居があり、西側の丘陵には寺院や神社がつけられました。その一方、河原宿五日市場、冠屋市場という市場が存在した大きな商業地でもありました。当時は、武士や役人、僧侶、商人、職人、旅人など多数の人々でにぎわう都市だったと想像されます。

### 3. これまでの発掘調査成果

発見された遺構は平安時代から江戸時代にわたり、大きく7期（第1期～第7期）の変遷が認められます。平安時代中頃（第1期）は畑や水田として利用され、同時代の末から江戸時代（第2期～第7期）は大小さまざまな屋敷がつけられたことがわかりました。年代は、第1期が9世紀末～10世紀前葉、第2期が10世紀中葉、第3期が12世紀、第4期が13世紀～14世紀、第5期が15世紀～16世紀、第6期・第7期が17世紀（＝江戸時代）以降です。資料の後ろに年表を付けましたので、それぞれの時期にどのような出来事があったのかについては、そちらを参照して下さい。



むつふちゅう  
 陸奥府中概念図（斉藤利男 1992 を一部改変）

#### 4. 今年度の発掘調査成果

今年度は、遺跡南部で約 2,300 m<sup>2</sup>、北東部で約 600 m<sup>2</sup>の調査を行いました。その結果、南部で第 期の屋敷跡、第 期以降の井戸跡や墓跡、北東部で第 期以降の屋敷跡などを発見しました。以下、南部の調査成果について説明します。

##### 【第 期の屋敷跡】

南部の調査区は、これまでの調査で発見されていた鎌倉時代～南北朝時代の武士階級の屋敷跡の南東部にあたります。

屋敷跡は上からみると方形をしており、西は南北道路に面し、東は湿地が境となっています。北と南は大溝で区切られ、規模は東西 70m、南北 50mほどになります。

今回発見したのは、屋敷を囲む区画溝跡や建物跡、土坑、溝跡、ゴミ捨て場の痕跡などです。

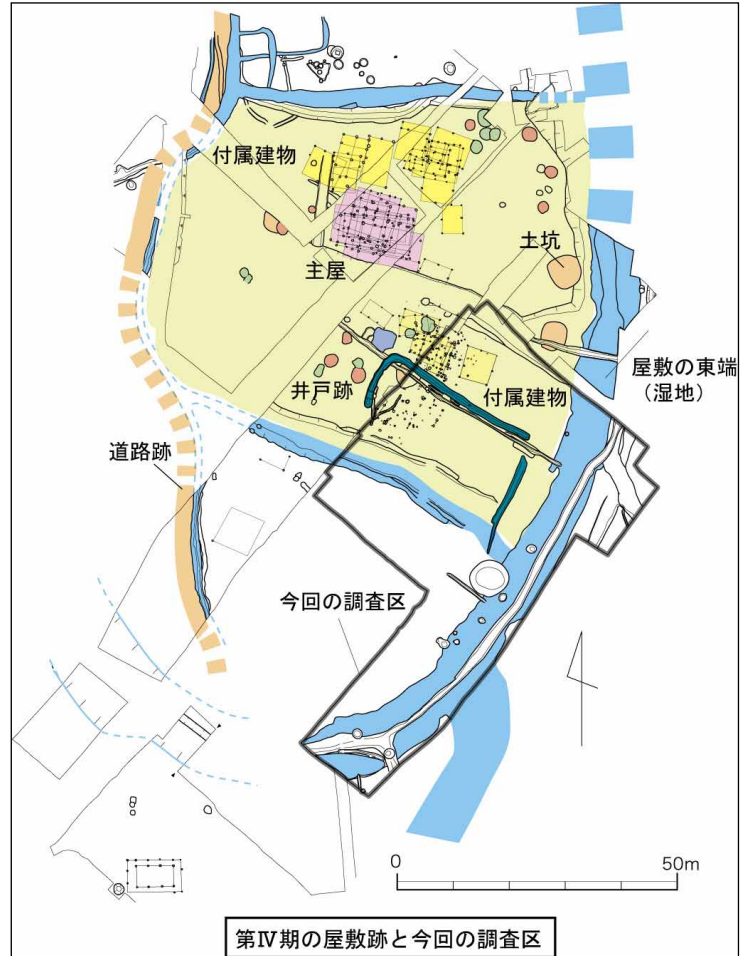
**区画溝跡** 屋敷の南端にあたる大溝（堀）の跡です。あまり残りが良くなく溝の幅や深さははっきりわかりませんが、屋敷の北端の溝跡は幅 2.0m、深さ 0.8mほどありましたので、こちらもそれくらいの規模であったと考えられます。

**建物跡** 鎌倉時代をはじめとする中世の屋敷には、主人が生活をする主屋のほか、<sup>くりや</sup>厨（台所）<sup>うまや</sup>厩（馬小屋）倉庫などの付属建物が建っていたと考えられます。今回発見した柱穴群は、場所が屋敷の南東部にあたり、中央部でみつかった主屋とみられる建物跡よりも規模が小さいことから、附属的な建物跡と考えることができそうです。なお、南東隅ではまわりを溝で区切られた一画があり、その西寄りで建物跡が見つかっています。

**大型土坑** <sup>どこう</sup>調査区の西端中央には、直径約 5 m、深さ約 1 mの大きな土坑が掘られています。

この土坑からは、以前の調査で修験者とみられる人物が墨で描かれた楕円形の石が出土しました。

**ゴミ捨て場** <sup>いぶつほうがんそう</sup>（遺物包含層） 屋敷の東端は、古代以前に河川が流れていたところで、第 期には幅約 8 m、深さ約 0.6mの溝状の湿地になっていました。ここからは、焼物や道具など様々な遺物が出土しており、当時はゴミ捨て場として使われていたと考えられます。



建物跡の柱穴群



### 【屋敷外側で発見した遺構】

井戸跡や墓跡、大型の土坑などを発見しました。

**井戸跡** 直径約1m、深さ約1mの井戸跡が7基見つかりました。6基は地面を掘り下げただけの素掘りの井戸ですが、1基だけ、井戸の内部に木組みの骨組をつくり、そのまわりに小枝を立てならべた形のものがありました。

**大型土坑** 直径約6m、深さ約1mの大きな土坑が見つかりました。出土遺物からみて第<sup>どころ</sup>期の屋敷と同じ時代のものとみられます。この土坑から、鯨の背骨の一部が出土しました。

**近世の墓跡** 調査区の中央西側の部分では、江戸時代ころの墓跡が10数基ほどまとまって見つかりました。骨や銅銭などが出土しています。

調査区の全体写真



井戸跡



近世の墓跡

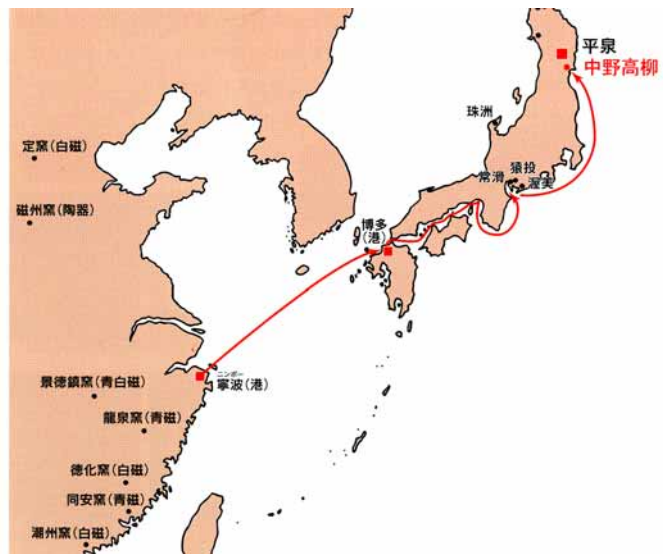


ちくぜんのかくに  
**筑前国の武士の屋敷** (現在の福岡県 『一遍聖絵』より)

## 【出土遺物】

屋敷跡や遺物包含層 (= ゴミ捨て場) からは、焼物や漆塗りの食器、木・石・金属で作った道具類のほか、植物の種子や動物の骨などが出土しており、当時の人々のくらしぶりについてある程度知ることができました。ここでは、過去の調査で出土した遺物を含めて概要を述べます。

かわらけ・国産陶器・中国産磁器・漆塗り製品(碗・皿)・木製品(下駄・曲物容器・箸・横槌・小刀の鞘・戸車・鞍)・石製品(砥石)・金属製品(包丁・鍋・小刀・釘)などが出土しました。かわらけは素焼きの土器で、ロクロづくりと手づくねの2種類があります。皿のような形をしており、それぞれ大・小ありますが、量としてはロクロづくりの小皿が圧倒的に多いです。国産陶器は、愛知県の常滑産や渥美産のほか、地元(とこなめ)の白石産や愛知県瀬戸産、日本海側の窯の製品などがあります。本遺跡の特徴として、国産陶器は地元産より常滑産が多いことがあげられます。中国産磁器は白磁・青磁・青白磁が認められます。



**焼物の産地** (『柳之御所跡常設展示図録』) を一部改変)



ロクロかわらけ皿



ロクロかわらけ小皿



白磁碗



青白磁小壺



瀬戸おろし皿



常甕甕



常滑三筋壺



瀬戸天目茶碗



常滑甕の押印



釘



下駄



横槌



渥美甕の押印



包丁



人物が描かれた石

屋敷跡から出土したさまざまな焼物や道具

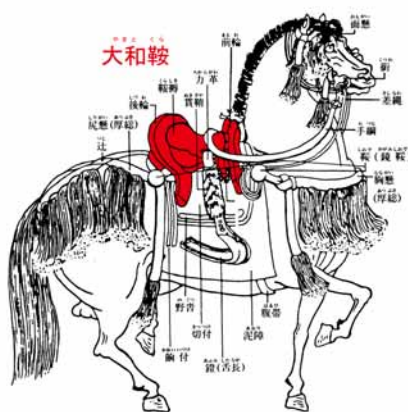
今年の調査で遺物包含層から漆塗りの鞍くらが出土しました。鞍は、馬や牛の背に置き、人や物などを乗せるようにする道具です。出土品は乗馬用の鞍の一部で、「前輪まえわ」と呼ばれる部分にあたります。焼けているため、漆はごく一部にしか残っていません乗馬用の鞍には、唐鞍からくら・移鞍うつし・大和鞍やまとくらなど種類がありますが、本例は「大和鞍」と考えられます。発掘調査で中世の鞍が出土した例は鎌倉や平泉を除くときわめて少なく、貴重な発見となりました。



鞍の出土状況



鞍(前輪部分)



大和鞍の模式図と装着



下駄



瀬戸天目茶碗



鞍



ロクロかわらけ小皿



白木椀



鯨の脊骨

さまざまな遺物が出土した瞬間

## 5 . まとめ

今回の調査では、遺跡南部で鎌倉時代から南北朝時代の屋敷跡、江戸時代以降の井戸跡や墓跡、北東部で鎌倉時代以降の屋敷跡などを発見しました。

南部で発見した第一期の屋敷は東が湿地、西は南北道路東側溝、南北はそれらと接続する東西大溝で囲まれています。規模は東西70m前後、南北50～53mで、今年は屋敷跡の南東部を確認しました。また、屋敷の井戸跡や溝跡、大土坑、道路側溝、湿地跡からは、土器・陶磁器・漆製品・木製品・金属製品・動物の骨・植物の種などが出土しました。こうした遺構や遺物のあり方を詳しく調べることによって、屋敷に住んだ人々(在地領主=武士階級)の生活の様子をある程度具体的に知ることが可能になります。

発掘調査で鞍が出土した例は非常に少なく、これまで主として伝世品や絵巻物・文献で研究されてきた馬具の変遷を考える上で貴重な発見となりました。

## 6 . 中野高柳遺跡の調査成果

平成6年度から始まった中野高柳遺跡の発掘調査の総面積は約45,720㎡です。これは、遺跡全体の約91%にあたります。調査の結果、平安時代中頃は畑や水田として利用され、同時代の末から江戸時代は大小さまざまな屋敷がつくられたことがわかりました。とくに12世紀～16世紀代の集落跡をほぼ全域調査した例は全国的にみても少ないです。このため、本遺跡の成果は在地領主とそれをとる多くの人々のくらしぶりを古代末期～中世を通して検討できる貴重な資料といえます。

鎌倉時代から江戸時代は、遺跡内で場所を変えながら屋敷がつくられました。屋敷は、幅2～3mの大溝で方形に区画され、内部には建物や井戸・土坑(穴)などがありました。施設ごとにつくられる場所が異なっており、屋敷内の場の使われ方が固定的かつ継続的であったと考えられます。

屋敷の外側にある幅1mほどの溝で囲まれた小さな区画は、屋敷の主と主従関係にあった人々や一般農民、道具をこしらえた職人などの住まいとみられます。武士の屋敷(館)のまわりには、こうした小区画をともなう住まいが集まり、これらが一体となって一つの集落を形成したと考えられます。

平安時代は、河川が遺跡北部の中央から南部の東縁を南に流れ、南端付近で西に向きを変えています。古い畑跡と水田跡は、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰かいはくしよくかざんばいの下で見つかりました。畑は灰白色火山灰が降ったため耕作を中止しており、その後起こった洪水で埋まっています。火山灰は青森県十和田湖の火山から噴出したものですが、そこから約250km離れた本遺跡も災害を受けたことがわかりました。新しい畑跡は古い畑と位置を変えてつくられましたが、再び起こった洪水によって耕作を中止しています。

これらの遺構や地層を調べることで、平安時代中頃に遺跡周辺をおそった自然災害の実態とそれが人々のくらしに与えた影響について具体的に知ることができます。

## 中野高柳遺跡関係年表

時代	西暦	和暦	宮城県のできごと	国内のできごと	遺跡
平	869	貞観11	陸奥国に大地震が起こり、多賀城の建物が倒壊し、城下は津波が押し寄せた。水死者は1000人にのぼる	(850) 出羽国で大地震起こる (859) 藤原良房、人臣で初めて摂政となる	
	870	貞観12	陸奥国修理府を置き、多賀城の復興を開始する(第	(866) 応天門の変が起こる (878) 出羽国の俘夷、反乱する(元慶の乱) (888) 藤原基房、人臣で初めて関白となる (898) 遣唐使の派遣を中止する	
安	934	承平4	この頃、灰白色火山灰が降下する 陸奥国分寺の七重塔が落雷で焼ける	(935) 承平・天慶の乱が起こる	期
	1051	永承6	前九年の役が起こる(～1062)	(1016) 藤原道長、摂政となる (1053) 平等院鳳凰堂が落成する (1086) 白河上皇、院政を始める	期
1083	永保3	後三年の役が起こる(～1087)			
時	1105	長治元	藤原清衡が平泉中尊寺を建立する	(1156) 保元の乱が起こる (1159) 平治の乱が起こる	期
	1143	康治3	多賀国府の名が初めて見える(『台記』)	(1167) 平清盛、太政大臣となる	
代	1170	嘉応2	藤原秀衡が鎮守府將軍になる	(1180) 源頼朝、伊豆で兵を挙げる (1185) 壇ノ浦の戦いで平氏が滅びる	期
	1177	治承元	角田市高蔵寺阿彌陀堂が再建される		
鎌倉時代	1181	養和元	藤原秀衡、陸奥守となる		期
	1186	文治2	諸国に守護、地頭が置かれる		
南北朝時代	1189	文治5	源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼす。葛西清重が陸奥国御家人の奉行を命じられる	(1192) 源頼朝、征夷大將軍となる (1221) 承久の乱が起こる (1232) 御成敗式目制定される (1274) 蒙古が来襲する(文永の役) (1281) 蒙古再び来襲する(弘安の役) (1333) 鎌倉幕府が倒れる	期
	1190	建久元	伊沢家景が陸奥国留守職になる		
室町時代	1259	正元元	この頃、法身禅師が松島円福寺の住職となる	(1336) 足利尊氏、建武式目を定める(室町幕府の成立) 後醍醐天皇、吉野へ移る(南北朝時代の開始)	期
	1333	元弘3	北畠顕家が陸奥守となり、義良親王らとともに奥州に下向する	(1338) 北朝が足利尊氏を征夷大將軍に任命する (1351) 観応の擾乱が起こる	
南北朝時代	1336	建武3	北畠顕家、鎮守府將軍として多賀国府に再び下向する		期
	1345	興国6	吉良貞家と畠山国氏が奥州管領として多賀国府に下向		
室町時代	1351	正平6	畠山国氏、吉良貞家と府中、岩切城で戦い、敗死する(岩切城合戦)		期
	1377	天授3	余目持家と伊達政宗が一揆契約を結ぶ		
室町時代	1392	元中9	陸奥・出羽両国が鎌倉府の支配下に入り、奥州管領制が廃止される	(1392) 南北朝の分立が終わる	期
	1522	大永2	伊達積宗が陸奥国守護となる	(1467) 応仁の乱が起こる(～1477)	
室町時代	1536	天文5	伊達積宗、『塵芥集』を制定する	(1543) ポルトガル船が種子島に鉄砲を伝える (1549) ザビエル、キリスト教を伝える	期
	1542	天文11	伊達積宗、子の晴宗と戦う(天文の乱)		
室町時代	1567	永祿10	伊達輝宗の子(のちの政宗)が米沢城で生まれる	(1573) 織田信長、室町幕府を滅ぼす (1585) 豊臣秀吉が関白となる (1590) 豊臣秀吉が全国を統一する	期
	1589	天正17	伊達政宗が会津の芦名義広を攻め滅ぼす		
室町時代	1590	天正18	伊達政宗、小田原の豊臣秀吉の下に参陣する	(1600) 関ヶ原の戦いで東軍が西軍を破る (1603) 徳川家康が江戸に幕府を開く	期
	1603	慶長8	仙台城がほぼ完成する		
江戸時代	1608	慶長13	伊達政宗、將軍秀忠より松平の姓を賜り、陸奥守となる	(1615) 大阪夏の陣が起こり、豊臣氏が滅ぶ 幕府、武家諸法度と禁中並公家諸法度を定める	期
	1613	慶長18	遣欧使節支倉常長ら180人が月ノ浦を出帆する		
江戸時代	1615	元和元	支倉常長、イスパニア国王、ローマ法王に謁見する		期

第 期から第 期の年代は、現時点での理解であり、今後修正される可能性があります。  
1330～1392年の和暦は、南朝の年号を採用しています。



⑦

鎌倉時代から南北朝時代の屋敷の様子